

いきんぼの海

山下明生作 田畑精一画



あかね創作児童文学・6

いきんぼの海

山下明生作 田畑精一画



いきんぼの海



著 者 やま した はる お 山下 明 生
発行者 岡 本 陸 人
印 刷 新興印刷製本株式会社(本文)
錦明印刷株式会社(オフセット)
製 本 中村製本株式会社
発行所 株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1 〒101
電話 03(263)0641<代>
振替 東京 3-64150

1976年2月25日発行

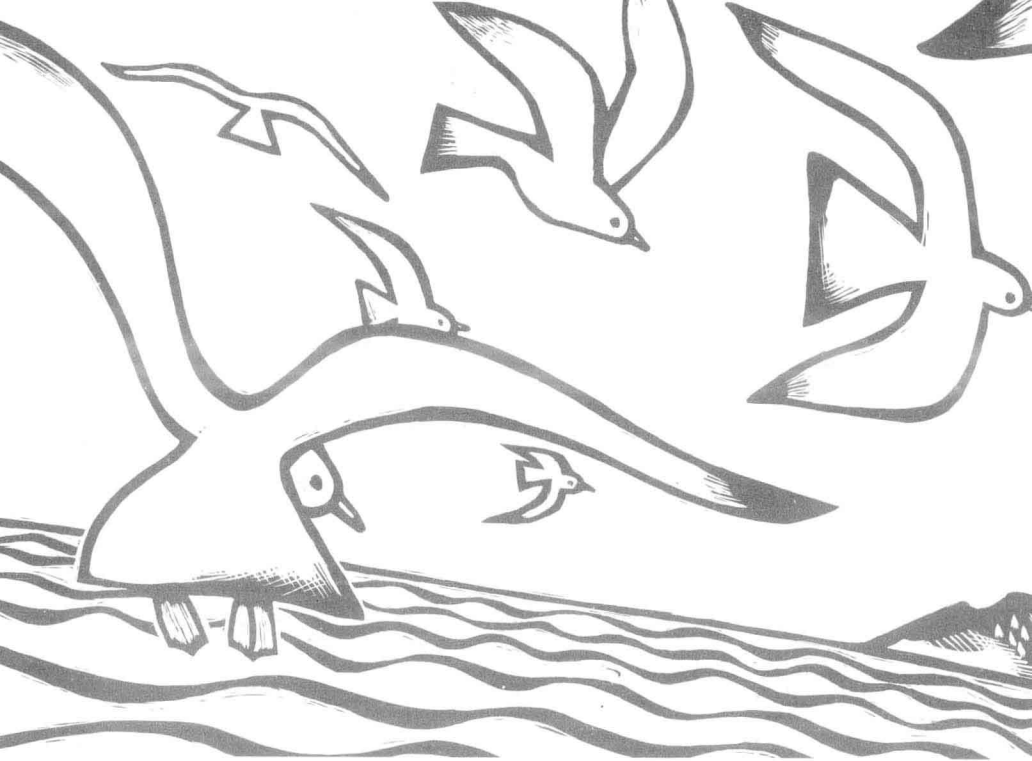
NDC 913

8393-16706-0027

山下 明 生
いきんぼの海

あかね書房 1976
169p 21cm (あかね創作児童文学 6)

© 1976 Printed in Japan 著者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります



瀬戸内^{せとうち}の島^{しま}の子どもたちには、
こんな遊び歌^{あそびうた}があります。

いーき いーき いきんぼ

わーれが 死^しんだら

みな 死ぬ^{しぬ}る

どうか元氣になつておくれ

おまえが死^しんだら

みんな死^しんでしまふよ……

そんなやさしい氣持^{きもち}をこめて

とつた魚^{うしな}を海^{うみ}に返^{かえ}しながら、

日暮^{ひぐ}れの浜^{はま}でうたうのです。

もくじ

- 1 ・ カモメの島^{しま} ＊ 6
- 2 ・ なきんぽおにいちちゃん ＊ 21
- 3 ・ うら山の小さな墓^{はか} ＊ 35
- 4 ・ ふたりだけのひみつ ＊ 48
- 5 ・ ながいながい夜 ＊ 62





6 ・ ゆうれいの正しょうたい体 * 85

7 ・ 死しんだふりして * 104

8 ・ アツしゅぼうの手て術 * 116

9 ・ 勇ゆう気ある少年 * 140

10 ・ いきんぼの歌 * 153

あとがき * 168

そうてい・さしえ／田畑精一

著者紹介

山下明生

(やましたはるお)



一九三七年生まれ。広島県の能美島で育つ。京都大学文学部卒。海育ちの海ずきで「かいぞくオネション」「うみのしろうま」「島ひきおに」「しっぱなしさん」「いたずらぎつねおさん」など、海を舞台にした作品が多い。一九七五年「はんぶんちようだい」で小学館文学賞受賞。

現住所 横浜市港北区日吉本町一七〇三一二一五一二

画家紹介

田畑精一

(たばたせいいち)



一九三一年大阪生まれ。京都大学をとびだし、人形劇で各地をまわる。子どもの本にひかれ「ばくたち緑の時間」「おいしいれのほうけん」「そりになったブナの木」「トモカツキのいる海」「算数病院事件」など、暖かい親しみ深い画風を確立。夏はヨット冬はスキーで、万年青年の若さを保っている。

現住所 東京都東久留米市学園町二一七一

山下明生作／田畑精一画
いきんぼの海



1・カモメの島^{しま}

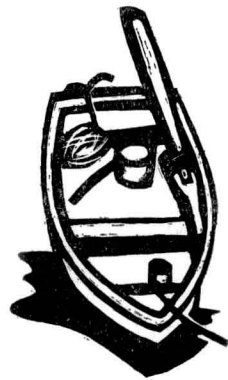
アツぼうって子、知ってる？

ほんとうの名前は、山下^{やました}淳史^{あつし}。あまえんぼでいばりんぼでおこりんぼで、きかんぼでくいしんぼでけちんぼで、とつてもいやんな子なんだよ。

それにね、もうすぐ小学校四年生になるというのに、すぐく子どもっぼいの。まだ、おねしよすることだつてあるんだ。そのくせ、とうちゃん^{ちやん}のひげそりを、こっそり持ち出して、ひげをそるまねをしたりするんだよ。たまごみたいにつるんつるんの顔のくせして。へんな子でしょう。

あんな子と、ぜったいに遊^{あそ}ばないほうがいいよ。

だけどぼくは、いつもそのアツぼうと遊ばなければならぬんだ。いやだけど、しかたがないんだ。だつて、アツぼうはぼくのおにいちやんで、きょうだいはふたりきりなんだもんね。でも、ことしの夏になったら、もうひとりふえるはずなんだ。かあちゃん



に、赤ちゃんが生まれるんだって。

ぼくのうちは、瀬戸内海せとないかいの小さな島しまにあるんだ。地図があつたら見てごらん。ほら、広島湾ひろしまわんの入口に、ザリガニがはさみをひろげたような形の島があるでしょう。

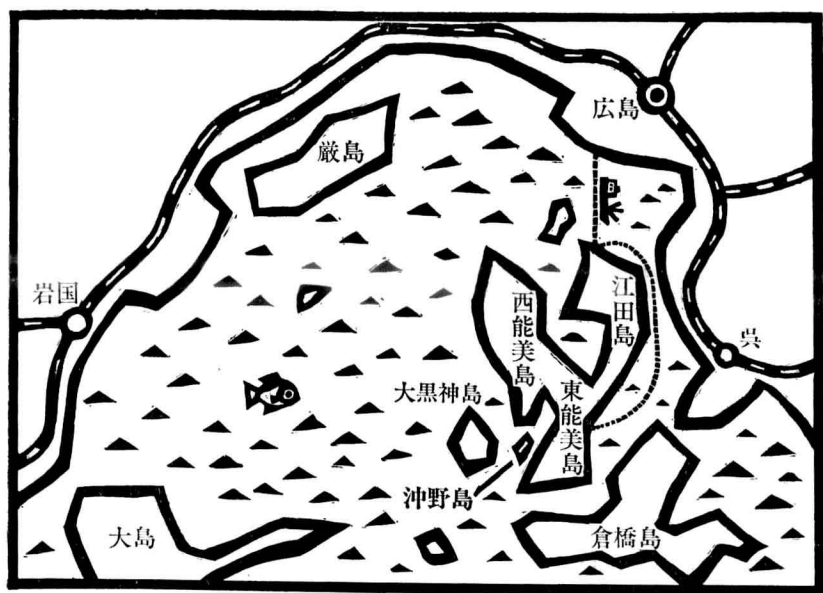
そのザリガニの右のはさみが江田島えただじまで、左のはさみが西能美島にしのもみじまで、おなかの部分が東能美島とうのみじま。そして、そのおなかにくつつくように、まるでザリガニのたまごみたいなのが、ぼくたちの住すんでいる沖野島おきのしま。

ぼろっちい地図には、ぼくたちの島はのつていないって、アツぼうがいつてるよ。

ぼくのとうちゃんはね、アツぼうが生まれたころにこの島へやってきて、社長さんと真珠しんじゆの養殖ようしよくをはじめたんだ。景気けいきのよかったころは、毎日二十人も、能美島からはたらくきに來ていたそうだよ。

だけど、アツぼうが小学校へ上がるくらいから、海がだんだんきたなくなつて、いい真珠ができなくなつたんだって。おまけに、ミニ・スカートがやりだして、真珠があまり売れなくなつたんだって。

どうして、ミニ・スカートと真珠かんけいと関係があるのかわからないけど、ぼく、ミニ・スカートってきらいだな。それなのに、となりのマサミちゃんは、ミニ・スカートがだいすきなんだよ。



マサミちゃんは、小学校二年生だけど、やっぱり子どもっぽい。だから、アツぼうとは、へんになかがいいんだよ。アツぼうなんかと、遊ばなければいいのにね。

いまでは、この島にはぼくのうちとマサミちゃんのうちの二けんしかない。社長さんは、真珠に人手がいなくなったので、能美島へうつって、町会議員になった。月に一度くらい、こちらのようすを見に来るだけだ。

あとは、東京に行っているハローおじちゃん、ときどき帰ってくるだけだ。

ぼくのとうちゃんとマサミのとうちゃんもね、ほんとうは能美島へひっこしたらしい。沖野島には、学校も病院もないんだもんね。でも、真珠がうまくいかなくなって、借金だらけで、動けないんだそうだ。

「ぼくが大きゆうなったら、社長になって、借金を追いはろうちやるけんのお。」

そういつてやると、とうちゃんは、黒くなった銀歯を見せて、あははとわらう。

とうちゃんたちは、真珠の仕事をくりなおして、ことしの夏から民宿をはじめんだそうだ。それでまたお金がかかるので、うちのとうちゃんとマサミのとうちゃんは、毎朝つれだって、能美島へかせぎに行っている。

朝、暗いうちに起きて、船外機つきの船でビューンと行ってしまう。

ぼくたちの島では、船外機が自動車で、てんま船が自転車みたいなものなんだ。

これまで、アツぼうとマサミちゃんは、うちのかあちゃんに、向う岸の能美島までてんま船で送ってもらい、そこからふたりで、小学校へ通っていた。学校まで、歩いて四十分くらいかかるんだ。

ただどね、こんどの新学期からは、アツぼうがてんま船をこいで行くことになったんだよ。うちのかあちゃんに、赤ちゃんが生まれるからね。

ぼくも、こんどから幼稚園にいくんだよ。だから、アツぼうのこぐてんま船に、マサミちゃんと三人で、いっしょに乗って行って、いっしょに乗って帰らなくっちゃならぬいの。いやだけど、しかたないでしょ。ミチコおばちゃんだって、家のことでいそがいんだもの。ミチコおばちゃんというのは、マサミのかあちゃん、うちのかあちゃん

の妹いもうとだよ。

そのミチコおばちゃんはね、

「ほんま、アツちゃんがいってくれて、助すけかるねえ。みるみるたのもしゆうなつて。たいへんだろうけど、たのむわね。」

アツぼうを見るとすぐ、こんなことをいうんだ。向むこう岸ぎしなんて、目と鼻はなのところなのに。どなればきこえるくらいだよ。とちゆうには真珠貝しんじゅがいをつるすいかだかならんでいるから、船ふねがひっくりかえったって、いかだづたいに泳およいで帰れるほどなんだよ。

それなのに、おおげさなアツぼうは、

「まかしといてよ、おばちゃん。ぼく、週刊誌しゅうかんしで人工呼吸じんこうこきゅうのやり方、おぼえたんです。だれかが海に落おちても、ぜったいに助けます。買物でもなんでも、どんどんいいつけてください。」

ことばづかいも、ミチコおばちゃんにだけは、ていねいなんだ。ぼくだって、買物くらいできるよ。

そうそう、ハローおじちゃんというのは、お話わを書いている人でね、一年に一回くらいしか島しまにはもどつてこないんだ。帰ったときには、おみやげくれるから、ぼくは、そんなにきらいじゃないよ。



だから、こんどのこの話も、ぼくがハロー
おじちゃんに教えてあげたのを、おじちゃん
が紙に書いてできたんだ。

あ、わすれてた。ぼくの名前は山下和博。
年は、五歳と半分だよ。

*

あのね、このあいだ、すごくへんなお天気
の日があつたでしょう。

菜の花がさいてもう春なのに、雪が、虫み
たいに飛んできたりして……。

昼すぎから雨になったので、ぼくは、こた
つにもぐってテレビを見ていた。はなれ島だ
って、ちゃんとテレビも電話もあるんだよ。

子どもの時間のまえだから、あまりおもしろ
くない番組だったけど、ぼく、がまんして見
ていたんだ。

そこへ、アツぼうが学校から帰ってきた。マンガ雑誌を両手でひろげてはいってきて、へやのまん中にしゃがんだまま、読んでいる。

ぼくは、こたつから出てテレビを消した。そして、アツぼうのマンガ雑誌をのぞきこんだ。するとちんぼのアツぼうは、ぼくに見せまいとして立ち上がった。

「わしにも見せてよ、おにいちゃん。」

ぼくは、びよんびよんとびはねながら、いった。

「カズくんには、わからんじやろう。」

アツぼうは、わざと、てんじょうのほうまで本をさし上げた。

「マンガくらい、もう読めるよ。」

ぼくは、アツぼうの腕にぶら下がった。

「ほらほら、やぶけるじゃないか、本が。借りた本じゃけん、カズくんにはだめよ。」

「よっしゃ。見せてくれんのなら、はさみでちょんぎっちゃる。」

ぼくは、ミシンのところへ、はさみをとりに走った。

そしたら、アツぼうが、いったんだ。

「そうじゃ、カズくん。これから、きもだめしごっこ、しようか。」

「きもだめし？ どうやるんね。」

「むかしのさむらいには、毎晩^{まいばん}、自分の顔のま上に、ぬいた刀を糸でつるして、そのま
ま寝^ねよった人がおったんじゃ。」

「どうしてよ？」

「もし糸が切れたら、刀が顔につきささって、いちころじゃろうがい。そがいなところ
でも、平気^{へいき}で寝られるだけのきもつ玉がなかったら、強いさむらいにはなれんのよ。」

「そんなら、じょうぶな糸で、つり下げりやええじゃないか。」

「ぼっかじやのお、カズくんは。いつ切れるかわからん糸じゃないと、きもだめしには
なるまいが。わしが、いまからカズくんにきもだめししちやるけん、そこへ寝てみい。」
アツぼうは、ぼくの手からはさみをとりあげると、釣り糸^{いと}でしばって、電球^{でんきゅう}のところ
からぶら下げた。

「ええか、この下へ寝んさい。さいしょは、じょうぶな糸でためしちやるけん。」

「もし切れたら、どうするよ。」

「もし切れても、ほんまの刀じゃないけん、死ぬ^しこたあないよ。」

「もし死んだら、どうするよ。」

「もし死んだら、焼き場^{やば}へ持^もって行^いって、焼いてやるよ。」

「焼いて、どうするよ。」

ぼくがきくとアツぼうは、にやにやわらいながら、いったんだよ。

「焼いたら、みんなで食べちゃるよお。カズくんのおかずは、おいしいおいしい、いうて……」

「いやじゃ、食べられるのは！」

ぼくは、アツぼうの足をけつとばした。

「切れりやせんよお。カズくんは、きもつ玉が小さいのお。そがいなことじゃ、幼稚園へいかれりやせんど。ほら、ひっぱってみい、このはさみを。」

アツぼうは、ぼくの手をつかんで、はさみをひっぱらせた。たしかに、じょうぶな糸だった。ぼくは、すこし安心して、はさみの下によこになった。

「本気で寝んにや、きもが太うはならんど。さあ、はよ、寝んさいよ。」

アツぼうは、ぼくのおなかにふとんをかけると、自分はまた、マンガ雑誌を読みはじめた。

ほんとうに、アツぼうってずるいやつだよ。ぼくをそうやって寝かせておいて、自分はマンガのつづきを見ているんだから。

しばらく寝たふりをしていただけ、ぼくは、だんだんがまんできなくなってきた。だつてアツぼうときたら、きもだめしごっこをわすれたみたいに、ギャツハツハ！と、